

麻生路郎★主宰

創刊大正十三年・通卷二百五十五號

昭和廿二年七月一日 第三卷第廿五號  
昭和廿二年六月二十五日發行 第三卷第廿五號  
地方一冊一冊發行



六月號

Pensoj flugas trans la land - limon

No. 255





# 續川柳講座

(15)

麻生路郎

## 川柳の三形態に就て

川柳は表現形態として文語體の句、口語體の句、話し言葉の句の三つに分類することゝ出来ませぬ。

### (一) 文語體の句

次に文語體の句を例示し、それ等の句を透して文語體の句の在り方を述べて見たいと思ひます。

完膚なく虫に整されしキヤン

（閑生）

肉百反絶えて久しき奢りなり

（背明）

袈裟とれば何を憚る酒肴

（鐵洲）

男みなモシヤ〜と憶み

（沐天）

けり

（幽王）

秋齋條つもる不平をいかにせ

ん

（丹路）

ともだちの現れては消ゆ雲のごと

（丹路）

何れも今人の句であります

が、「完膚なく」と云ひ、「虫に整されし」と云ふ表現が文語體であることは説明するま

でもありません。 「絶えて久しき」と云ひ「奢りなり」も同様であります。 「袈裟とれば」にしても「憶みけり」「いかにせん」「現れては消ゆ」「雲のごと」にしても、何れも文語體であります。

如上の句に徴しても、文語體の句は口語體の句や話し言葉の句に比して何處となく重苦しさがあります。 それだけに嚴肅、莊重、靜寂と云つた内容の表現に適するやうであります。總じて句品も秀れてゐるやうに思はれますが、藝術的價値は必ずしも句品の尺度だけで決定することは出来ないのでありますから句品のよさが他の口語體の句や話し言葉の句よりも秀れてゐるとは云へません。

右に擧げた句の中で、「袈裟とれば」の句は「何憚らん酒肴」と續ければ、文語體としての句の強さが、更に倍加すると思ひます。同じ文語體の句にしても「男みな」の句は他の句に比して柔かみがあるのは「モシヤ〜」と

云ふ擬聲語が含まれてゐるからであります。 それと反對に「秋齋條」の句は「肅條」と云ふ漢語の硬さが、句意を強めて淋しさを一層効果的にしてゐるのであります。しかしながら文語體の句の欠點はそれ等の語彙の魅力に頼りすぎて、陳腐な句、厭味な句、内容の空疎な句になり易いことあります。

次の句はその一例だと云へるでせう。

母校にて

校門より久し六月の空暗れぬ

既に滿つ笑ひたのしも古生徒

(×××)

この作者は殆んど文語體によつて作句してゐますが、句品のよさを誇りとしてゐるのかも知れませんが、私の云ふ文語體の弱點を餘すところなく露出して、川柳の埒外に去つて居ります。

文語體の句例を今人にとりましたが古句にもよい句例はかなりにあるのであります。次にその二三を擧げて参考に資します。

神代より日月今に地におちす  
女房の云つた師走になりけり  
われ未だ精進と云ふ日を知らず  
去る時に唇に沙汰もせざりけり

川柳の生ひ立ち前は前句附の附句を獨立させて句意の判り易いのを冀めて「柳多留」を編んだのはじまるのであります。では、その半身である前句附の題とは一体どんな形式のものであつたかと云ひますと、その多くは今やおそとく一方は海一方は山引ツ張りにけり〜すましこそすれ〜の如く、七・七音の十四音字であつて、それへ五・七・五の十七音字を附けたのであります。時にはさりとはくわりりとしたる心なり

と十七音字の題を課しよめが小唄をどうとめが弾くのやうに、十四音字を附けたのであります。それが、それ等の課題の多くが文語體であつたこともかかはらず、附句の多くが口語體として詠まれてゐることを發見するのであります。そして川柳として單獨に詠まれるやうになつても、それ等の多くが、俳句のやうに文語體で詠まれますに、口語體で詠まれてゐる原因が、何處にあるかと申しますと、川柳は所謂民衆のものとなつて、平言俗語で詠まれたためであらうと思はれます。詰り平言俗語は文語體を口語體へ誘導した

譯であります。袴を脱がして丹前を着せた形であります。そして袴をぬいで丹前を着たために、人間味がウンと出た譯であります。

明治の初期までは文語體で小説を書いてゐたのを山田美妙や二葉亭四迷などの先覺者が言文一致を提唱してから口語體で書くやうになつたの一寸似て居ると思ひます。尤も小説の方は選まれた人たちが意識的に、口語體で書くやうになつたのであります。が、川柳の方は大衆が作家であるところから、それ等の用語として平言俗語が自由に、しかも自然に用ひられるやうになつたのであります。そして文語體を僅に残してその殆んどが口語體の句となつたのであります。しかし口語體と云つても、全然話し言葉の句となつた譯ではありませぬ。

それは、文語體で書いてゐた小説が口語體で書かれるやうになつたと云つても「何々なりき」と書いてゐたのを「何々であつた」と書き「何々なり」と書いてゐたのを「何々である」と書くやうになつたのと同じ、文語體と話し言葉との混合體のやうな口語體で句を詠むやうになつたのであります。では、どんな句が文語體くすれの口語體の句かと申しま

すと、

乳母が頼あやしてこせは笑はれる。

かんな肩かみく大工といで

居る

里歸り夫びいきにしようはなし

などでありませう。柳樽にある

これ等の句は何れも文語體の

句でもなければ話し言葉の句

でもありません。所謂川柳の

大半は斯うした表現で構成さ

れてゐるのであります。つま

りに平言俗語で作句したため

に、文語體を放れて斯うした

句風が自然に生れたのであり

ます。これは現在でも同じで

あります。斯うした表現の句

を私は口語體の句と呼んで居

ります。そして従来、口語體の

句として呼んでゐた句を私は

話し言葉の句と呼ぶことにし

て居ります。

### (三) 話し言葉の句

文語體の「何々なりき」を

口語體では「何々であつた」

として表現しますが、話し言

葉では「何々でした」と云ふ

云ひ方をいたします。演壇で

なら兎も角、人と對話する時

には、「何々であつた」とか

「何々である」とは云はない

のであります。話し言葉の句

と云うのは語り、會話體の句

を云うのであります。

即ちその句の内容を飛躍さ

せるために、句の中の人物の

一人、或は一人以上の言葉を

藉りて句を構成し、光景を髣

々の句となるおそれがありま  
す。  
お詣りに行くつてやつと出て  
來たの (小次郎)  
愛人の呼吸抜ひを間近に感  
じさせられるのも話し言葉の  
句の持つ妙味ではないでせう  
か。  
この頃は雑巾のやうになりま  
した (革郎)  
もみくちやにされてゐる人生  
が、「雑巾のやうになりまし  
た」の一語によつて迫つて來  
るのを覺えます。  
葬式で會ひばほいことおまへ  
んか (豆秋)  
「葬式で會ひ」と云ふ説明語  
と、「ばほいことおまへんか」  
と云ふ話し言葉で構成された  
句であります。話し言葉が、  
どんな場所でも話されたかを説  
明することによつて句意を深  
酷にさせてゐることに氣づく  
であります。  
お千代さん婿がひろくは泊ま  
らうか (古句)  
これは加賀の松任の俳人千  
代女が廿五歳で夫に死別した  
時に、  
起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣  
さかな  
と云ふ句を詠んだので、その  
千代女に呼びかけた句であり  
ます。「ひろくば」は文語で  
あります。人によつては話  
し言葉として「ひろくば」と  
いふ云ひ方をいたします。た  
とへ、「ひろくば」が、文語  
體でありましても、この句な  
どはその大半が話し言葉で構

成されてゐるので、話し言葉  
の句に入れてよからうと思ひ  
ます。  
床の軸親和とやらが書きんし  
た (古句)  
「床の軸」は「葬式で會ひ」  
と同じ様に、その場面を表は  
すための説明語であります。  
「親和とやらが書きんした」  
が吉原の花魁の言葉でありま  
すから「床の軸」は花魁の部  
屋にかゝつてゐる軸であるこ  
とを表現してゐるのでありま  
す。「琴棋書画ならべたばか  
り知りんせん」と云ふ句があ  
ることから類推出來るやう  
に、多くの花魁は性慾の對照  
に過ぎなかつたのであります  
が「親和とやらが書きんし  
た」と云ひ得る位の女もゐた  
のであります。三井親和は江  
戸深川の住人で安永天明の頃  
能筆で世に知られて居た書家  
であります。「書きんした」  
「知りんせん」はアリンズ言  
葉と云つて吉原の花魁用語だ  
つたのであります。軍人用語  
に「そうであります」が來る  
やうに、各地から賣られて來  
た花魁に用語の統一をはかつ  
たのであります。參勤交代で  
江戸へ出て來た田舎侍が遊客  
として吉原に遊んでも言葉が  
通じらぬやうに一つの政策が  
行はれたのであります。  
さうした風俗や習慣を知る  
時に、話し言葉の句の味が一  
段深められるのであります。  
京極でお踏みやしたといひ慕  
り (只英)

にしても  
さうぶすかさうやおへんに乗  
りすこし (汀果)  
にしても、いかにも物ややら

### 文藝人懇談會

ブランドン氏を迎へて

四月廿七日午後五  
時か、四天王寺本坊  
に於て英詩人のエド  
マンド・ブランドン  
氏(東大英文學講師)  
を圍む文藝人懇談會  
が開催された。會す  
る者、今村阪大總長  
平林女專校長、高安  
吸江博士等に詩人、  
音楽家、書家、小説  
家、歌人、俳人、川  
柳人を加えて三十數  
名主催側を代表して  
府の中村社會教育課  
長のくだけた挨拶が  
あつてすぐに懇談に  
入つた。興酣になつ

Edmund Blunden  
27 April 1948

かな京言葉で、京都といふも  
のを巧みに捉えてゐるではあ  
りませぬか。話し言葉の句の  
妙味も、こゝまで來れば大し  
たものであります。  
て安西冬衛氏がブランドン先生を  
迎へるの詩を賦し、これを阿部知  
二氏が翻譯してデアイケートし  
た。詩人側から、英  
國の詩人は詩だけで  
生活してゐるかどう  
かと云ふ、いかにも  
切實な質問が飛び出  
した。  
一流の詩人は詩で  
生活してゐるが、他  
の人は教師や講演や  
放送でやつてゐる  
點、日本と同じだと  
のこと。  
川柳に就ては川柳  
に似たパンチと云う  
のが、新聞や雜誌に  
掲載されてゐるとの  
話だつた。  
(署名のカットは  
ブランドン先生)

夏の家調度

器具口皿

阜灯 卓提

ちわ子 うち扇

その他各種

二階家具賣場

丸 丸

大阪心齋橋





伊丹市 岩崎柳路

ステッキをへし折つて見度い氣のする日  
女事務に奢らされたり四月馬鹿  
エロ談義又阿部定の話が出

病中吟(二句)

灰皿にアンブルがあり病んで居る  
瘦せ腕のどこへ打つのか皮下注射

横濱市 福田山雨樓

闇市の小屋朝からの鯉職  
澤庵をさげ働きの男の子

川柳大會不參を謝す

西むいて首の細さをうなだれる

尼崎市 水谷鮎美

ようやく軌道を越へた蛙の子  
荷車へ父をのせてるうらゝかき

舊友と脊合せのパスにゆれ

晩春の風まるきかなシガーマニア

あひゞきの袖口メリヤスが見える

上流は鮎の名所とホトトギス

家庭の灯(三句)

明けてくる窓美しく髭を剃り

末の子が早や起きて来てスケートだ

煙草巻く長女に春の窓の月

旭川市 宮田不二

故障ですとは受取れぬ走りやう  
日本全國また學堂に叱られる

在校生一同を代表してつまるなり  
和田肇にまかせきつたるピアノの音  
橋村の繪になる今日の村時雨

奈良縣 西垣錦風

納税をすました頃は櫻散り

眼鏡はたけばほこりの出る奴だ

赤チャンはノーズブロスがお好きです

検問所何か不氣味なベルが鳴る

滞納の會社の花見派手なこと

大阪市 市場没食子

仕立賃借りたまんまで年を越し

中風で寝てゝも人が儲けさせ

税金にギヤフンと春をたゝかれる

望まれて養子になつて不倖せ

手間賃にローンク代も無論入れ

評判を氣にしていつも後手となり

お父さんがなあと子の愚痴妻の愚痴

轉んでも自己宣傳は忘れてす

大阪市 須崎豆秋

お見習ひ遊ばせ蟻の行列を

うそにでもうまいといふてやる夕餉

サンマータムだつせーお父さん

パンパンの吸殻らしい紅がつき

花見から糊帯をしてもどるなり

十錢のライスカレーもなつかしや

大阪府 宮岡白峯

女闘もせまく鯨の舟がつき

軒に雨見つめて大工さんの晝

松本市 石曾根民郎

井で食ひのけ逢ひにゆく瞳なり

生きる道求め合つてる灯が流れ

同棲がつづくわびしきマツチ箱

よこしまな戀にマツチはまだ點かす

熊やがてひとりを愛す歩みなり

妻の死にあふ  
大阪市 黒川紫香

父と子の暮しへひよこ一つ飼ひ

朝さむし今日から減つた米をどき

家計簿が二月で絶えた淋しさよ

雨の驛妻が迎へに來てそうな

分擔を決めて父と子の暮し

妻の居ぬ玄關あける淋しさよ

遺骨を抱ばほろゝ雨が降り

間違へて母親呼んだ子のゑくば

いろゝの藥の袋だけ残り

通學と通勤遺骨だけ残り

書く事の嫌ひな妻の會計簿

藥瓶半分残したまゝほられ

大阪市 竹内潮花

洋装で出れば小鳥のように馳け

下戸花にころべは故郷の山が浮く

何處へ行く水かつゝしの色をのせ

夢のない暮しとなつた家計簿よ

奈良縣 尾崎方正

新聞にたゝかれ爭議一寸やみ

長い目で見ると言つたが先に死に

目に余る闇を認めて課税なり

春うらゝ今撞く鐘は東大寺

岡山縣 濱田久米雄

障子張り替えて師を待つゝろ

村芝居母おどゝと着せてやり

メーデーをベースの話して別れ

亂世へ白血球が少なすぎ

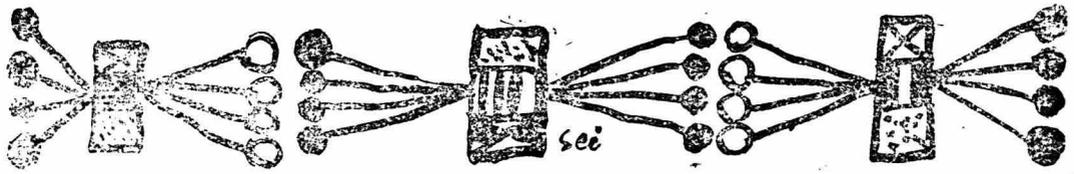
長生きはして見るものか夏季時間

大牟田市 高田抱逸

食ふための辛さへ驛で押へられ

教ストに父兄顔だけ出しておき

遞ストに手紙は知らぬまゝ泊り



物をやらねば知合やけど取合わす

岡山縣 大森 風來子

正札を質せば桁がはね上り

女性解放組の音絶えざるも

内閣を大喝一聲してみたし

貧しさは妻の財布を盗み見る

春爛漫漫画の戀の派手なこと

大阪市 木下 幽王

闇相場近所のヤトナに教へられ

ブローカー氣取で手帳どりいだし

終電車五十歩百歩の顔運ね

青春をストとラブとに消費する

何とさまり文句の多いお悔み

老を知る日に知つたげてももの屋

前掛は養子みただからいやだ

初産に早や學校を氣にしかけ

鳥取市 中島 鐵洲

妻の座に又母として夢圓し

内祝母前垂を外して來

春の陽に出浮き手品の種を買い

頑張りの利かぬを妻にねぎらわれ

追ふ聲と呼ぶ聲鶏も知つて居る

貿易の失敗談を隠居持ち

電話かして闇の取引聞かされる

一例を擧げるに自己を持つて來る

鐵のないそれが白紙の命にて

大阪市 橋本 美奈子

兄は醫者弟は坊主近く住み

亡き母のかたみを子供すられて來

文樂に西本願寺に母忙し

大阪市 水谷 竹莊

マフラーの中で色々思ふこと

鉛筆を削り直してよい儲け

千圓のチップを仲居驚かす

路郎先生の還曆を祝して

これから春だとおひげなで給ひ

胸に抱き心にもとめ母戀し

馬の背を洗ふ乙女へ夕陽する

鈴の音をのこして櫓は夜をはしり

教會へぬれた瞳のまゝで來て

接吻のそばを夜行車通り過ぎ

宇部市 國 弘半休

ゴムまりが凹んで出て來た大掃除

悪心へ体當りしたミス・ポリス

貴族席門出の愚痴がこみ上げる

八代市 佐野 ト占

行進の後尾だまつてついて行き

配給の事も書いてるプラカード

沙干狩股の中から聲をかけ

兵庫縣 小澤 史葉

金借りた事も忘れて松の内

安來節上手になつて榮轉し

トランクの中へ露天の早じまい

べんちやらをする男だどさげすまれ

春のどか鬨争本部も煙草巻く

兵庫縣 小西 無鬼

タイヤの値段も知らず子等は乗り

不適正課税を難じ難じ飲み

二十年目稻荷開扉

善男子善女人いと少なかり

あの子もう娘になつた詣りよう

ストに入る

ストに入る話ストリーグ赤く燃え

神戸市 大鶴 喜由

小百姓勤めもしつゝつゝがなし

續續く日のうらゝかなることよ

歸來

古巢とはなつかしきもの肌が脱げ

子は階下に頼みそゝくき夜の花

民主化に遠く子供に家出され

子のカメラ俺と女房をひつつかせ

高槻市 久連 松春月

百万圓の夢新生を吸ふて寝る

ラツシユアワー闇屋のリユツク蹴たをされ

洞高い子がまゝごとを掻き亂し

○ 金澤市 安川 久留美

蓄えた髭にクス／＼タイピスト

御立ち寄り成された門に牛の糞

犯人をしぼつた時に靴が無し

すこやかに粥をすゝれば粥の音

その當座ナゼ良心を捨てゝいた

逢曳の崩れかゝつた橋はいや

姉妹山賊らしい髪かたち

けう見れば櫻の白い村えつき

朝ざくら口動かした僧が來る

木賃宿出た坊さんに雨模様

十露盤の埃をふいて五十七

小ぎたない盤の上も五十年

春わよし窓からくれたチュリツプ

松山 前田 伍健

万代磯鯛船

せり寄つた船人おどり鯛おどる

家あり人あり雀ありよい故郷

鶏小屋え伸よくしようど雀くる

こゝに巢があります雀葉をさげ

居並んだ雀舞台のよう喋り

御録え公僕として市長詫び

春長閑片山が來徳田が來



# 柳樽の剽竊句

## 富士野 鞍馬

「柳多留拾遺」思はせふり  
中に

黒主は武玉川から盗み出し

という句が見える。これは寛延三年から安永五年まで三十年間に二人の紀述によつて發行された十八冊の「俳諧武玉川」の句の中から、万句合前句附に盗用したことを諷刺したものでその當時江戸の各所の水茶屋で取次ぎ、作者の表徳を現さずに選句發表していた万句合であるから、それより前に發行されていた附句集の「武玉川」から剽竊盗用のあつたことは當然のことともいえるのである。

「柳樽」と「柳多留拾遺」とに重出している句は三千といわれているが、これ等は剽竊でなく、その原句は万句合で同じ刷物から採録されたのであるから、當然どちららえも

武玉川出てはばちをさらすなり (樽八五)

その盗用句はすぐに見破られることもあつたであろう。

年中用立つ前句師の曆摺 (樽二九)

いつも句會へ出る時古い万句合の曆摺を懐ろにしのぼせて、その中から借用したのもあつたであろう等のことが、右の三句で推察出来るのである。

句によつては何年かを隔てて、二回、三回と別な人に盗用されているのも多いが、中一番目立つてるのは

泥のつくものとは見えぬ御所車 (武初)

万句合から採録でなくなつたのは二十五編からで、これから後のものは三十編を除き全部作者の表徳が記載されてある。三十二編以後の、文化、文政、天保の「柳樽」は何れも各句會の題詠入選句を發表したもので

無き人の古句が會へまた生れ

(樽六)

という句があるように、どこかの句會でも相當古句剽竊はあつたものと見られる。

西海の波にたまよふ香包 (万寶二)

むかしから湯殿は智慧の出ぬ所 (樽初)

二十七編

もういくつあがると雑煮開合せ (樽八)

けいせい涙で内のくらが漏り (武七、拾六)

二十九編

虎の皮より恐ろしい緋ちりめん (拾八)

三十三編

蟻一つ貞女下帯までほごき (拾二、武二)

外をひく物とは見えぬ御所車 (武初)

三十四編

内ぞゆかしき駕わきの美しさ (拾三)

三十五編

相性は開きたし年はかくし (樽六)

緋ちりめん虎の皮よりおそろしい (拾八)

三十七編

房州もやはか相模におとるべき (樽六)

うごんげを小麥の花と下女思ひ (拾八)

三十八編

おてんばにかまひななんとてんば言ひ (拾二)

高級化磁料容器には動然!

チマギンの……

# 黒硝子

大阪府大阪市東區長野  
西通一丁目四番  
山銀株式會社  
電話堀川四四七番

泥のつくものとは見えぬ御所車 (武初)

火花を貰ひ日がくれる (樽二七)

へんてつもなく暮引は見知られる (拾九)

元服は異見をそへてほめる (樽二七)

なり (樽二七)

三十九編

内ぞゆかしき駕わきの美しさ (拾三、樽三)

信長は七書に秀で四書にもれ (樽六)

いとこへ来たとき高つかわれる (樽二六)

でけへからおらやだといふ (樽二六)

四十編

石塔の赤い信女が又はらみ (武二六、拾二)

お妾は二世と三世の間のもの (樽二八)

四十一編

投げ入のひからびて居るけちなへや (樽初)

ほれ薬十日過ぎてもまたはなし (拾三)

四十二編

みな色と金だとおんま帳をくり (拾三)

錢箱のあるは羅漢の組頭 (樽三)

四十三編

後ろからしなとは余程月迫さ (末初)

四十四編

げんの子女を玉とおぼえて (拾八)

小枕のしまりかげんに目をねむり (武初)

四十五編

覆の倍正餅屋と向ひ合い (拾八)

おいらんの日出度い顔 (禿泣き (拾六)

山伏で度々落をとる源氏方 (拾六)

うららかさしきりに鏡がほしくなり (樽七)

風の神背中を流す身ぶりなり (樽三)

ごのうそがほんの女房になる (拾六)

四十六編

車裡ばばあ元は二俵も踏んだやつ (樽三)

四十七編

おもしろき一人きなよのみこと (樽七)

龍の口すでに一宗たぬと (樽二)

サンマー・タイム

(はがき懸紙)

須崎 豆秋

うちの鶏はサンマー・タイムを無視してコツケココとやられるのでグツが悪いですが、お隣ではサンマー・タイムに入る日に柱時計を息子が一時間くるつと廻しておいたのを知らずに親仁もくるつと廻し都合、二時間早くなりました。

一 大阪

川柳不朽洞會員

四十八編

辻番へうばが差圖のかしわ餅 (拾初)

そちは二世あれば三月四日まで (末四)

五十編

白石は六十四五手先が見え (樽五)

寝ぼけたで四百七人程に見え (樽二)

五十一編

美しいはつ世ざかりに來た (樽六)

女房 (樽六)

五十二編

金持と見くびつて行く初松魚 (樽七、拾初)

居候拳を押しへてしかられる (樽四)

五十三編

兩手を出して二見の物語り (拾三)

芳町の翌日べつこうの大味さ (末三)

勝軍向うで焚いた飯を喰い (拾五)

五十四編

ちりくくとどつかりゆく (樽二)

五十五編

よくいえはわるくいわれる (樽六)

五十六編

片乳は里子へひびく暮のかれ (拾九)

柿の皮むいた自慢に立つて見せ (拾三)

五十七編

死すべき時に死なざればなまりぶし (拾七、樽二)

五十八編

不審紙だらけな四書の拂物 (傍初)

五十九編

御祐筆人を遣ふも筆の先 (樽五、拾二)

六十編

送る膳美しいかときいて見る (樽三)

六十一編

甲を見て値の出来る初鱈 (拾初、樽八)

笈摺はみかんで着初め柿でぬき (拾三、樽二)

年明けは出しがらを喰ふようなもの (拾八、樽三)

ほれたとはすこしのことでいいにくし (武初)

六十三編

朝歸り女房團十亭主ぐにや (樽四)

足がまがろうと娘の下駄を借り (樽七)

里の母生れた文を抱きあるき (樽初)

六十五編

ぬしの手で御箸紙とかきなんし (拾八、樽三)

(以下次號)

麻生路郎著 水武書房版



最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者本書を繕くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又参考書であることは刊行前既に注文の殺到してゐるのに見ても明らかであらう。敢て一讀を薦む。

B 6 版 二一二頁 定價 八五圓 送費 金一〇圓

取次御注文は

大阪市住吉區西五丁二五番地 舞鶴口廣大阪七五〇五〇

川柳雜誌社



風呂敷を抱えて小さな闇をする 愛媛縣 青明  
 兒を抱けば春の陽射しのつきまじり 同  
 不機嫌な社長訛りを全部だし 同  
 環境と云ふ恐ろしき子を見つむ 同  
 薄給の父と軽んずるならん 同  
 たまさかに會へば貸すぞこないかいな 同  
 電球のあんまり潔よい最後 鳥取市 日満子  
 読み書きを教ふるほどの父なるや 同  
 その度胸がないで貧乏してます 同  
 斯様云へばあとが崇ると思はれて 同  
 せめてもの夢を會社の往き戻り 同  
 借金のため五千と思えども 同  
 上役へへつらふ父をさげすめず 下松市 白星  
 誰の子か言はずうなじのたゞよるへ 同  
 身のあかし立たず深夜の霧に濡れ 同  
 角帽をレットルにしてアルバイト 同  
 世渡りが上手でもらひ泣きも出来 同  
 親馬鹿を大佛さまに見られて居 大坂市 草々  
 リヤカーの平素は邪魔なぐま居る 同  
 死ぬ程の熱が結婚して醒めた 同  
 ダンサーの爲替故郷に子が育ち 同  
 鯉のぼり赤は弟黒は僕 同  
 雀でも代用食はせぬものを 布施市 醉月  
 新制高校男女共學 同  
 共學は父兄の方が反對し 同

花に飽き柳の良さが目にとまり 同  
 参詣るたびローソク代も上つてき 同  
 春の御のたりくどボリス巡き 同  
 失戀の一途に走るトラピスト 神戸市 キヨ子  
 張り合つた新妻故にこぼされず 同  
 満員車彼氏ばかりを乗せて行き 同  
 全快へ初めて明かす質のこと 同  
 澄んだ氣でそばがたべたい大晦日 同  
 戦ひの日から農家に住み馴れて 山梨縣 嘩子  
 切り花よりも哀れに散る長女 同  
 母のない子供の髪を梳ひてやり 同  
 女性本願園の女のなくなる日 同  
 物思ひするにうれしい石油の灯 同  
 病んでから巻くを覺へた闇たばこ 大坂市 ひさみ  
 いたどりを吸ふて課長さん氣焔 同  
 白粉の價よりも安い男ども 同  
 敗戦のカバンをかけて何處へ行く 同  
 銃とつた筈の男がやにさがり 同  
 國力より此の体力を如何にせん 兵庫縣 自由郎  
 焦るなど云うがおなかは三度へり 同  
 買出し肅々夜河を渡つて御用 同  
 元閣下道樂でない魚釣りに 同  
 ハーモニカもうおちない毛をのぼし 同  
 港の灯淫らな聲が通り過ぎ 徳島縣 梅窓  
 波止釣へ所長はいつも下駄でくる 同  
 愚かなるものよと靴の裏が言ふ 同  
 太い指戀の言葉は知らぬなり 同  
 養つてくれる女房の肩をもみ 尼崎市 聴松  
 泡盛の店に佗しき我が姿 同  
 葬式の花などかつき生きて居る 同  
 このルール傳えば故郷の驛に行く 同



石曾根民郎

### 秋春筆雜

「川柳雜誌」二、二月號の吉田水車君の詠つた句に  
 れすみも聲帯模寫に  
 をごろかす

がある。たゞニューモア溢れた句として別にすぐれた内容ではないが詮索好きな私は安永二年刊の『御伽草』といふ江戸小咄に出てくる「聲色」と、元禄年刊の『狂言記』の「柿山伏」を思ひ出した。小咄の方では、鼠がさわぐので、寢床のなから猫のまわれしてニヤアンといふと不思議にちぢこまつて動かぬ。外の鼠がなぜ居るか」と訊くと、初の鼠がこゝへ來や、面白い、わ色を聞きやとある。狂言の方は、他人の家の柿の木に登つた山伏が、持主にからかはれて猫と言はれたり、犬だといはれたりして、終りに罵るといはれた揚句おつち、そこで問答になるやりやりの可笑しみである。水車君は聲色といはず現代的に聲帯模寫としたのがヤマなのだらう。

### 役人の名刺

木下幽王

として來た。止むに止まれぬ魂の叫びであつてみれば、なんの束縛があつてたまるものかと思ふ。我が過去の作品中もつとも長律のものは三十一文字短律のものは十二文字である。何んでも彼でも一つの型に無理矢理に詰め込むのはどうかと思ふ。私は自由律は決してきらいではない。むしろ愛してゐる。定型で育つた私であつてみれば定型の美くじきを捨て様とは考へた事もない。月々の各誌發表句が如實に此れを立證して行く。全てが作句する事の自由の現われにすぎない。よい句をうるための一手段ともいへ得られる譯である。近頃賑わつている川柳論は其の人達にまかしておくとして、其の名論家かならずしも名作句家に限らないことだ。口も八丁手も八丁のむづかしさを見る。論する事も悪くはないが、柳人は柳人として黙々として名句を世に送り問ふ人を忘れ勝つては申譯ない。私は數十枚の論文より一句の名作に接したい今の氣持をはつきりと知つた。

會社の所要で大阪の某官廳の事務官に陳情に向きました。漸くにして順番が廻つて來ていかめしい肩書のついた名刺をうやくしくもらひ、さてほつくと泣事から申述べ色々頼み込みましたが例によつて法規一点張りの固くらしい返事を聞き乍ら、ひよいと今もらつた名刺の裏を見ると、何と鉛筆の走り書で

### 農繁寸想

加賀 前田義風

作句する自由、私は此れを信條

値上した風呂へ瘦せてる顔が浮き秋 田夕帆  
 都會地の流石持つてる賣つて居る 同  
 辨當の色も流石に米どころ 同  
 貴方さへ儲けて来れば肉も煮る 同  
 公園で言譯をする共稼ぎ大阪市千舟  
 稅務署の名刺主人をあはてさせ 同  
 催促に行つて子供にあしらはれ 同  
 洋裁へ通ふところを見染められ 同  
 年甲斐もなくエロ雜誌讀みふけり高槻市丁路  
 唇を電光石火盗まれる 同  
 草に寝て春の大氣をむさぼりぬ 同  
 そよ風に袂が靡く日本趣味 同  
 ガラス窓割つたさみえて寂かなり鹿兒島畑草  
 風の日には早寝と決めたわら家の灯  
 けつまづき女子供を先づ叱り 同  
 歛の土落せばながい影法師 同  
 停電は聲をたよりに聲をかけ神戸市高明  
 母の手は女房の手より荒れてをり 同  
 満員車ネンネコが又乗り遅れ 同  
 失戀の頃に覺えた呑みつぶり 同  
 ふかし芋紅い氣焔がしばし止み神戸市登志坊  
 初戀を亭主にかくすいゝ女房 同  
 チューリップ挿せば娘の部屋にさす 同  
 退院の他人行儀を妻笑い 同  
 夕焼の色が染みそな服で出る兵庫縣花子  
 ひどり出て水のリズムを楽しめり 同

戀すてた日から競馬へ手を出して ナミエ  
 菜の花を切つて命日すませとき 大阪市絹江  
 露路裏に住んで二號もやせて来た 同  
 溜息へ百圓札では足りません 同  
 溜息にいつしかたにし子をふやし 同  
 ガラスのない列車に冬もやつと 同  
 都電スト車掌も出るに一寸困り 同  
 鼻紙とは日本タイムス氣がつかず 同  
 子寶があり貧しさを乗り切る氣兵庫縣國子  
 御大家も時代の波に流されて 同  
 鯛買ふて去ぬは人種の異ふ人 同  
 ニイチャンがアレあきいる兒童劇唐津邦夫  
 録音へ父の聲あり祭唄 同  
 街頭録音すてゝはならぬ聲があり 同  
 横向きで課長私用の客に會ひ松江市快哉  
 敬子生る 同  
 御先祖に燈明あげて父となる 同  
 列みばかりの配給 同  
 役所のご家のご煙管二つ持ち 同  
 素裸にされて邪戀の夢が覺め岡山縣七面山  
 勞働は神聖吹葦集めての 同  
 アベツクを横目で送るミス・ポリス 同  
 戦車ならもう置きませぬ玩具店石川縣光郎  
 寄進燈全盛時代もあつたげな 同  
 逆境はノツピキならず土に生き 同  
 スナツプ屋さても人の氣知らぬ呉市魁光  
 振袖に風少しある宵の街 同  
 葉櫻となつて家内は何な縫ひ 同  
 整理事務大財閥が夢の跡大阪府水滴  
 スナツプに寫して欲しい二人連 同  
 ぜんざい屋味とは別ないのれん 同  
 川風の匂ひへ向いて髪を梳く兵庫縣萬龜子

親子三人床の中  
 夜中に坊やが目さまし  
 母ちゃん今のは何の音  
 今のは地震だ、れんけしな  
 杓子定規な事はかりむつたらしい  
 顔で言ふてる役人が、この時ほし  
 馬鹿面であわれに見へたことはあ  
 りません。大方どこかに招宴でも  
 されてこんな歌をうたふつもりだ  
 つたのでせうか。  
 あんまりあほくさいので陳情も  
 そく／＼に引あげました。此の次  
 も一皮陳情に行く時は先づ此の名  
 刺を見せながら本筋に入らうかと  
 思つて居ますが、それではあまり  
 かあいそうではせうか。それとも反  
 つて逆効果になるでせうか。いづ  
 れにしても名刺の裏に落書などゆ  
 め／＼するものではありませぬ

### ハガキ通信

尼崎市 水谷鮎美  
 大掃除

春期大掃除(四月二十八日)を  
 した。春陽が窓から我家の隅々ま  
 で覗いた。うれしい限りである。  
 新聞紙の太くおほきい一包を繕て  
 みると昭和十四、五年時代の川柳  
 雑誌が續々と現はれてくるこれも  
 うれしい限りである。殆んど隔月  
 に句評會があり丹路・亜細・里十  
 九・鏡々・某人・豆秋・おさむ  
 夕鏡・霞乃・路郎・鮎美等々で花  
 々しい。この中に某人氏と小生と  
 は見解の相違が各所で見られた川  
 柳は理論でなく体験を創ることに  
 あつた小生に反論を唱へた某人氏  
 の今柳界に雄飛せられぬは非常に  
 惜しい。いゝ意味に於て某人氏よ  
 立たれよ。こんなことを想ひなが  
 ら湯にひたる。

### 川柳と演劇

水谷竹莊

勞働者、農民、勤勞市民達の文  
 化的慾求をもつとも充足せしめる  
 ものは、何をおいても演劇で、演  
 劇こそ勞働文化運動の先頭に立た  
 なければならぬと思ふ。  
 その演劇にヒントをあたえらるも  
 のは川柳である。いままで私は私  
 ちば餘りにも川柳を寫實の詩との  
 みしか取扱はなかつたのではなか  
 らうか。人生をよりよく生きる方  
 法として、寫實の表現でなく一歩  
 進んで、もの中心をつかむ眼を  
 養つて藝の川柳にまで伸びること  
 のよさを信ずるものであるこの意  
 味からの發展は今後大いに川柳す  
 劇や新しい川柳劇が芽生えて来る  
 ことを思ふものである。ごんな川

女産のために



ワダカルシューム錠

ゴシツパへ素直に笑ふ様になり  
 藤の花茶室を春の色にする 同 萬龜子  
 妾宅も落目證人として喚ばれ 長野縣柳 兒  
 霸氣抱いて汗の生活をうとく居る 同  
 ミス・ポリスめて私服を派手にする 同  
 ミス・ポリス仕事は仕事戀は戀岸和田みのる  
 焦らだし故障車荷物試運轉 同  
 ガラス切り百圓がとこ切れる也 同  
 なが持ちのする花活ける妻になり 大阪市斜 水  
 人間も二十のどびらちや動物さ 同  
 一坪へ種ばかり買つてしかられる 大阪市のぶを  
 儲け口又か妻は聞き流し 同  
 配給と云つてもこれとこれだけさ 大阪市良 子  
 子供等が親父のストを非難する 同  
 シペリヤの話にふれまい母は病む 島根縣遮 坊  
 ロケーションの様に二人も花の下 同  
 妻病篤く形見も手放す 兵庫縣桃 源  
 春うら女に見入る補助車掌 同  
 父チャンはストを聞かれたあそき 愛媛縣小 樓  
 風の夜を別れた人の話する 同  
 春かすみ脳病院へつゞく 路金澤市冬思夫  
 落ぶれてからの友情をしかと抱き 同  
 迷信を笑つて寄附に斷われず 愛知縣常 市  
 全快の嬉しさ家計簿まだ見せず 同  
 すぐ迷ふくせを淋しく爪を噛み 茨城縣舞 扇  
 共稼ぎ影を重ねて朝を出す 同  
 妹の夢タカラズカ・ハリウッド 大阪府きはち  
 戀は愉し雨の舗道のプラタナス 同  
 誕生を祝す手紙に春を乗せ 松江市風 子  
 人生の非喜かうもり傘に似て淋し 同  
 女警官民主の型に育てられ 神戸市政 好  
 平凡な妻の雑巾行き届き 同

立喰いの湯氣に動いた咽喉佛 神戸市一 手  
 朝詣り百萬圓の慾も云ひ 同  
 所長診慰められてより眠り 神戸市 やぶれ傘  
 菊人形時世と共に姿をかえ 同  
 芋ごはん芋ぜんざいの誕生日 神戸市政 雄  
 ダンサーの口紅に似た娘を叱り 同  
 芋本場闇屋が先に足を入れ 神戸市廣 美  
 農繁期立喰いの手に泥が見え 同  
 話まだ途中で降りる驛へ着き 大阪府紫 雲  
 九人目が出るがあなたどうし 同  
 永久に逢へない様なことを言ひ 神戸市美代子  
 不足料拂つてもいゝ便りが來 同  
 カンテキの煙に慣れた共稼ぎ 大阪市柳太郎  
 男女同權先づ男装に近くなり 大阪市桃 村  
 組合で青年の意氣認められ 大阪市三 郎  
 内裏様何万圓で鎮座まし 大阪市葉菜子  
 へば將棋晝の休みがみじか過ぎ 大阪市清 潮  
 九人目が出るが貴方どうします 大阪市岡 田  
 雨の朝約束のある靴を履く 大阪市椿  
 裏切つて來た淋しさを見る映画 大阪市花代子  
 ハイキング一人はずれて花を摘み 大阪市實  
 故郷へ歸れば母の肩ももみ 大阪市靜 花  
 事故のある度に保険屋うるさく來 大阪市河童子  
 持込配給あの公約はどこへいた 大阪市狸 村  
 お隣もうちも女の子が生れ 大阪市青 花  
 雑踏がきらいで日曜草を摘み 岐阜市巷 步  
 まな板の音木琴になる台所 豊中市柳 堂  
 繩飛びの中へ逆らふ男の子 大阪市梅 里  
 新妻の聲程もない指のどげ 神戸市文 福  
 通勤の歸りの道はねぎをさげ 高槻市公 臣  
 雨の音妻病む部屋の花が淋し 兵庫縣柳 風

柳でもよく味つてゐるとそこに劇  
 的要素を多分にふくんでゐるし、  
 新劇、歌舞伎、悲劇、喜劇、新派、  
 映画、何を見ても、川柳の材料が  
 ふくまれてゐないものはないのは  
 面白いと思う。  
 私は今までに私の勤務してゐる  
 病院のアマチュア演劇大會で川  
 柳才劇を自作自演して來ましたが  
 川柳が如何に劇的要素をふくんで  
 ゐるかと言ふ事を「川柳雜誌」四  
 月号の川柳塔の句の中から例を引  
 いてお目にかけませう。特に劇に  
 なりそうな句を擧げて見ますと  
 照友と政令違反の扉を押し  
 (柳 路)  
 風の夜の意見が違ふ父と子と  
 (鮎 美)  
 妾宅をつきとめ本部活氣つき  
 (錦 風)  
 痴語喧嘩女出てゆく音をたて  
 (潮 花)  
 あげくの果は易者の餌となり  
 (幽 王)  
 里親に研いで貰つて二人刺り  
 (鐵 州)  
 學期末希望が父を寒むがらせ  
 (半 休)  
 劇薬もあつてもよいと思ふ日は  
 (綠 雨)

以上の句をよく味つて下さい、ご  
 の句からも色々人生の悲喜劇が  
 生れて來ると思ひます。そしてこ  
 れ等の句から色々想像してゆき  
 ますと、どれも劇になりそうな句で  
 はありませんか。そしてどんな場  
 面でも如何なる社會の出來事で  
 も、それを五七五にまとめて表現  
 出來るのは私たち川柳家が、味が  
 へる喜びではありませんか。

先日マーケットと名の變つた關  
 市で百圓札を出して買物をして十  
 圓札六枚のツリ錢をもらつて歸つ  
 た。ツリ錢を調べてみると一枚の  
 十圓札が破れてゐてそれをシヤン  
 とした十錢札で裏張りしてあるで  
 はないか。僕はこゝに現在のイン  
 フルの實態を見たやうな氣がし  
 た。昔の十錢の觀念が抜け切らぬ  
 ので變な氣がしたのであつたが今  
 の十錢に何が買へるであらうか？  
 でも十圓と買へるさすがに金と  
 しての存在が認められてゐる證據  
 が十錢札の裏張りとなつたのであ  
 る。自分は土佐で百圓札をマン  
 幕にした馬鹿氣よりも一層鮮や  
 かに現在のインフル状態を見せつ  
 けられた氣がした。

### 十錢札で裏張り

千原庸司

### 喫みどり

清談・商談・お待合せに  
 みどりの商談  
 運が向いて來る  
 上六交又點西北角

美顔水  
 桃谷順天館



# 川柳漫筆は動く(一)

## 小畑自由朗

新婚は退け時のそら氣にして  
浩三

取締役社長かつての元殿下  
水車

水車

「おい君、空ばかり氣にして  
どうしたんだい」

「いや、それがね、雨が降り  
出すと、サイの奴がね、僕  
がいつて云うのに、傘を  
持つて驛迄迎ひに来るんだ  
よ」

「来たつてい、ちやないか」

「ところうがさ、驛から僕と  
こまで道が悪いだろう」

「だから可哀想だとも云う  
のか」

「うん、歸えりに、僕にお  
んぶして頂だいって云うん  
でね、其れで僕」

「此の野郎！」

人民天皇に問ひかけられて胸  
義風

「追 一日も早く全快をし  
てね」

「はッ、」

「お互ひに、日本再建の爲に  
頑張らませうね」

「はッ、やります、が、頑張  
るであります」

「ちや、くれぐれも身を大切  
にね」

「はッ、てッ、天皇陛下ッ」

「何んですか」

「ばーん」

「はあ？」

「ざーい」

「あゝさう」

「殿下」

「うん、いや、いかん、もう  
殿下と呼ぶことは断じてい  
かんよ、わしは降下して君  
等同様一民草にすぎないん  
ぢやから、而して當捕鼠機  
製造株式會社の一従業員に  
すぎないんぢやから、以  
後、遠慮はいらん、社長閣下  
いやただ單に、社長と呼ん  
でよろしい、故に、其由、  
よく、徹底する様に、下  
々人民に傳へておき給へ」

お通夜して場所もあろうに  
抱逸

「つまり、鮎釣のこつは、た  
だもうちよつとした竿さば  
きのかげん一つだしてな、  
つまりこう竿を持つてな、  
あゝもし、それ、佛さんの  
杖でおますので」

「あゝこれはどうも」  
「あゝんたッ、お通夜に来てま  
んねやで」  
千円で二人泊つて腹がへり  
普天

「のに」

「ほんまにさうでした」

「それでも出したお米だけ  
わしてくれてゆつたりさし  
てくれるねやつたら辛棒も  
出来るがや」

「ほんまにこのごつた返し  
方はどうだす」

「早ういんで、たつぷりめし  
詰め込んで、風呂えなどは  
いらんど、このくたびれが  
なほらんわい」

老眼鏡へ采れた記事の新世纪  
柳路

「まあ、お爺さん、こんな  
とこえ眼鏡をおいときなは  
つて、又孫がふんだらどな  
いしなはるねやいな」

「もう今日びの新聞なんか讀  
みたうないで眼鏡なんかど  
うでもえ、哩」

「ほんまになあ、それはさう  
ど、昨日のもらひ兒殺しは  
どない成りましたかいな」

「今日はそれどころかうかい、  
親殺しが出てる哩」

「今日がそれどころかうかい、  
親殺しが出てる哩」

一角に、今頃路郎先生、ど  
うして居らつしやるぢやら  
うね」

「全くちやよ」

「其れを思うと、わしや、な  
んだか、こう」

「さうちやて」

天氣豫報日本も度い雨と雲  
不二

「なあおい、日本も半分に成  
つてしまつた云うけれど、  
まだ、廣いもんや」

「そら又なんのこただす」

「今ラヂオが云うとるがな、  
同じ日本の中でも、今こゝ  
らは雨やけど、雪の降つと  
るとこもあるし風の吹いと  
るとこもあるし、さうかと  
思うと、うそみたいにから  
りと晴れとるとこもあるし  
や」

「うちみたいに火の車が廻つ  
とるとこおまへんか」

添養して父の無情を唄にする  
栗

「坊やはよい兒だねんねし  
な、坊やの父うちやんどこ  
に居る、あの山越えた町に  
居る、ねん、ねんころ今  
頃は、あのドスベタと今頃  
は、ちくしよ  
ッ」

「オギアアア  
ッ」

半分は戀のうれ  
しさ川にすて  
鮎美

「ね」

「だつて」

「一度だけ」

「いやあーん」

「……………」

「……………」

「すみません」

「あらッ」

「どうしたの」

「あんたがあんなことするん  
ですもの」

「だから、あやまつて居るぢ  
やないか」

「うん、あたし、トタンに  
ハンドバック川へ投げちや  
つたのよ」

同情もされずにダンスホール  
千舟

「うわあッ、火事や」

「どこや」

「なにんや、ダンスホールが  
焼けてんのやがな」

「しようむない」

### 柳人交歓

古書籍と川柳の店  
山根書房

山根 泉人

松江市堅町五一

## 胃酸過多

胃痛・胃潰瘍に…

# ノルモザン錠

大阪・武田薬品工業株式会社

45錠入



いのちのむくを刻れ

投稿規程
用紙は原稿用紙
文字を正
確に開催月日及場所記入
締切は毎月廿五日
投稿先本社

本社五月例會

於 一 運 寺
二日 午後一時

サンマータイムになつてはじめての句會
多年句會の世話人として活躍
を續けて來られた黒川紫香氏の夫人が亡
くなられたので皆別式の時間に一同黙禱
を捧げた。披露に先だつて路郎主幹から
「觀察に就て」の柳話があつた。

(一幹事)

出席者 路郎・梅里・春月・亞鈍・晴峯
野介・種美・無人・亞人・翠露・聽松
沒食子・綠雨・水月・文蝶・千舟・
幽王・好郎・克己・小松園・醉月・
みのる・靜一路・竹莊・栗・鮎美・
生々庵・茂・香林・葉光

兼題「ネクタイ」 麻生路郎選

慶びの日のネクタイを締め直し 鮎美
ネクタイもとられ未決の人となり 梅里
ネクタイの柄まで女覺えてる 克己
時間表へネクタイ締める急な旅 亞鈍
ネクタイが妻の花嫁の柄となり 種美
ネクタイの老いて益々はでになり 醉月
よいざれの蝶ネクタイがひんまがり 水月
赤らしい色でネクタイ賣れてゆく 翠光
泊る氣になつてネクタイはごくなり 亞仁
それとなく人柄のネクタイよ 水月
ネクタイの赤さはの氣に入らず 幽王
十年一日黒いネクタイして勤め 沒食子
猿殿のまゝネクタイをしめてゐる 種美
ネクタイまじつてゐる間に見合すみ 醉月

四疊半泊る積りの首帯をとき 亞仁
ネクタイを邪魔にしいしい飲んで 靜木
ノータイの存し下駄はきでやつてく 亞鈍
ネクタイが二本勤續二十年 醉月
ネクタイを直し記念の列に入り 沒食子
ネクタイのゆがんだ方が先に立ち 香林
出来たのか社長のネクタイ派手になり 同
蝶タイで万事よささいの幹事 葉光
感情を殺しネクタイもてあそぶ 好郎
だし昆布のやうなネクタイ今日も締め 翠光
ネクタイをしりぬ喧嘩のつぎは 同
くらしい氣持をネクタイに見せ 路郎
ネクタイが一本きりの父となり 同

兼題「鉄」

高鷲亞鈍選

植木屋の鉄がひびくいゝ暮し 好郎
大小の鉄で蟹の示威必死 葉光
洋裁師鉄は生てゐる如く 幽王
生きてるとかには鉄をくくられる 竹莊
さんばつや鉄でくしをボンと 同
ものさして引きよせてゐる鉄なり 同
新妻の鉄は鈴がつけてあり 晴峯
ごう刈ると鉄の音で考へる みのる
千代紙を切る子鉄が手にあまり 晴峯
姑の我流で活ける花鉄 千舟
花鉄持つ母の未だ老ひ給はず 翠露
面白い程アリキヤの鉄切れ 文蝶
日向ぼ鉄を持つたまゝ迎へ 鮎美
明日嫁ぐ人へ素直な花鉄 小松園
理髪屋の鉄シヤリくしゃりく 香林
裁鉄煙草一服すい付け 文蝶
木鉄をよつて身の空返事 栗
散髪屋鉄休めたホームラン 好郎
玩具ぢやないと鉄とり上げる 栗
紙屑をこさへる鉄持ちたがり 沒食子
もがく丈けもがいて蟹の鉄とれ 小松園
理髪屋が鉄に乗せて時局談 晴峯
工作の鉄をかれば鈴の音 沒食子
縁側で鉄研ぎやの聲を聞き 翠露

兼題「井戸」

上田翠光選

探して鉄ごもが持つて出る 綠雨
爪切るなごミシンの除からにされる みのる
手鉄の有つて洋裁出来る嫁 醉月
青春を蟹は鉄の色に見せ 小松園
二枚刈鉄の音へ眠くなり 千舟
はげちやびん鉄は右と左だけ 幽王
朝露へスソを氣にする花鉄 翠光
姑の鉄は錆びたまゝに切れ 鮎美
たち板をすべる鉄はうたがはず 翠光
親蟹子蟹月に鉄をさしあげた 野介
鉄だこあつて娘の聲がたち 同
夜なべする鉄の音へ子の寝顔 同
はくは鉄貴女の爪を切りませう 同

井戸端で第二の母の口がすぎ 栗
傳説の井戸をのぞけば陽が碧し 水月
古井戸へ生きたへチマが根をおろし 鮎美
井戸水に馴れて疎開をまだつげ 沒食子
野井戸に樂譜が忘れられてあり 好郎
あしたまでもつゝ魚を井戸につり 好郎
井戸がへ屋何か出きを泥を汲み 小松園
井戸掘れば井戸の中にもある世界 好郎
傳説の井戸へ無氣味な苦の色 葉光
井戸端の柳へ研屋荷をひるげ 葉光
イカーの無器用に波り振り釣瓶 竹莊
飲んでから井戸のいわれを讀んで 竹莊

兼題「鳩」

席題「節句」

手品師の鳩も舞台に慣れてをり 千舟
鳩飛んで進水式つゝがなし 亞仁
鳩が好き雀が好きだと子澤山 竹莊
越味の鳩今日は飯路へ連れてゆき 沒食子
二三羽の鳩へ和尙は豆を投げ 文蝶
再建の社へ鳩もいつか住み 千舟
土産で鳩が一すふいて見る 暗峯
戦争は鳩の數まで少くし 無仁
傳書鳩こゝまでといふ輪をえがき 克己
校庭は廣し鳩から明けはじめ 鮎美
たそがれて鳩の淋しい天王寺 文蝶
山鳩の鳴聲聞いてとろゝ汁 晴峯

阪田膽寫版
大坂市北區芝田町五二
株式會社 阪田商會
電話 福島一六三九番

席題「サンマータイム」

川村好郎選

今朝からのサンマータイムの陽を見つめ 鮎美
サンマータイム關係なしに子は誕れ 亞鈍
退けだけはサンマータイムよく守り みのる
サンマータイムはく子守をさるるか 翠露
サンマータイムの顔が並んだ停留所 沒食子
サンマータイム母最初から不足なり 聽松
サンマータイム煩着なしの鶏の聲 梅里
サンマータイム老母はまだ解せぬ顔 亞仁
サンマータイム纏るには早い金を持ち 文蝶
サンマータイムいゝなき思ふ春の風 竹莊
約束はサンマータイムも言ひ添へる 栗
サンマータイムたせはしない夕御飯 好郎
サンマータイムたせはしない夕御飯 好郎

席題「節句」

互選

節句には凡そ縁なき共縁ぎ 千舟
復員の兄を待つてる武者人形 沒食子
燕の巢節句の風が軟かし 同
初孫の節句田舎の父が來る 野介
今日は節句せめて味覺で親心 幽王



雑川 大牟田支部 (大牟田市)

於 三池染料管理課 高田抱逸報

花見・ボロ服・寶鏡

花は花俺は耕す子澤山 抱逸
花見時ヤミ米一寸はれ上り 抱逸
閉市へ花見歸りが吸ひこまれ 抱逸
病床の母へ櫻を折つて来る 抱逸
見合とは知らず花見の客となり 抱逸
ボロ服が似合ふ私の顔形 抱逸
ボロ服へまだ着るフセをあて 抱逸
つぎはきの服にもこもる親心 抱逸
新婚へ嬉しく買った寶鏡 抱逸
新生で釣る氣政府はずるくなり 抱逸

川 金澤支部 一周年句會 (金澤市)

五月二日 於 加登長本店

雑吟・一年・藤・記者・笑ひ・

想像画題・捨鉢・瓶・アベック・蛙
働くにしかずと破るはづれくじ 自然入
這腹へば詩人歩けば儲け口 美瓜露
俺といふものがつめぬ原稿紙 白林
行商は田植の村に來て疲れ 亂
言譯をする眼が壁につき當り 水
月給に疑問のかゝる靴をはき 撫昭
弱する目に素氣なき蘭の鉢 冬青
金持の屋根から朝の陽が當り 美瓜露
一年を器用に捌く花かるた 京村
机の塵はや一年を吹き飛ばす 久留美
そるばんへ出た一年へ税が来る 柳村
藤棚へ岡秀作家母と住み 柳村
輕裝の似合ふ女とくぐる藤 沐人
藝活けて妻には妻の氣のゆとり 夏波
新しい小使が來た藤の花 美瓜露
鶴にやる餡の上の藤の花 玄
藤の花風邪引きそうに兒は眠り 京村
藤茶屋へ來てパラツルの色劣り 久留美
非戦災都市でふ記者に頭あり 義風
櫻みな散れく〜特種を逃がした日 僕人
記者室の花あつちを向いて咲き 秋
朋輩へ間借の記者は茶を切りし 沐人

特種を送つて記者は服を乾し 京村
ホケットに特ダネがあり青い空 冬思夫
隨章の記者が走れば世が動き 京村
東京の裏面が好きで記者になり 舞狂
夕焼へ鐵骨脊をあざ笑ひ 笑路郎
七十の父が笑へばとがるアゴ 笑路郎
出迎ひの解つてるよな笑ひ顔 撫昭
配給の酒へ奇遇を笑ひ合ひ 天青
灸すた父の笑顔を淋しがり 沐人
産院のピラへ秘密のあるからだ 白林
犬にさへくわす生活を派手に出る 傷風
廣告に關係が有る女の目 傷風
見逃せぬ廣告犬が邪魔になり 亂
同様の世なりに自己を失はず 水
生きてゆく唯それだの牡丹刷毛 友路
なる様になれと眉引く夜のさほり 水樓
捨鉢のやりごこ猫をけつてみる 文雄
運命をせよら笑つて盡の酒 冬思夫
言ふ奴に言はせ捨鉢酔つてゐる 朱子郎
捨鉢へどの店もみな幕が下り 紅の花
どうにでもなれ一つ賣り二つ賣り 紅の花
捨鉢にすわれば帯がとけかゝり 亂
捨鉢に憎い男がよく眠り 銀甲
瓶わつた子にたそがれが追つて來 紅の花
アベックを遠くみてゐる豆煙管 茶佛
つゝまじ足袋の白さに歩を合せ 舞狂
星の名は知らず歩けばよい二人 白林
大の目に蛙が干せて砂埃り 友路
蛙の目雲をとらえて動かない 美瓜露
南無地藏蛙ビヨコンと手をついて 久留美

民主日本川柳大會

四月二十四日 於岡山市第五鐵道京

太陽・靜脈・他人・奇蹟・寶くじ
まん中・言ひ分・興奮・男手・秘密
人・さつそうとアローチ朝の陽をほじき 不朽
同・太陽へ細きが悲し十の指 四三坊
同・揮で稼ぐを太陽に見てもらい 葉光
同・太陽の下で二つの思想ひしめき 半休
同・太陽へパンツ一つのアルバイト 葉光
同・太陽とただ生涯を刻みいる 四三坊
同・愛さればおかしさの日射しなり 路郎
同・太陽を信じ一生銀を持ち 同

靜脈を子と見くらべて盡の風呂 千舟
靜脈の腎きに朝の陽が當り 勝介
人・靜脈のとこだけ垢が落とされる 九坡
地・靜脈を二三度こすり針を向け 弓削平
天・靜脈へ一本打つて見守られ 縁之助
軸・靜脈の最後を父が握つてい 縁之助
佳・悲しさはみんな他人に見える日々 北星
同・哀れにも他人の前でなぐられる 九坡
人・香典の高はやつぱり他人なり 萬夢
地・小金ためて他人の嘘にたがれる 萬夢
天・よく喋る他人の中でくたびれる 久米雄
軸・靴はいて歸るまである他人の眼 北路
人・公報と別に奇蹟を信じてい 小樓
地・奇蹟を笑い静かなベツトなり 小樓
天・生きていた奇蹟に星が美しい 通常
軸・奇蹟にも生きた命を故郷で 通常
佳・寶くじでも當ればと生あくひみ 通常
同・寶くじ黙つて買つてしまひ込み 通常
同・くじ運がよい子に買はず寶くじ 通常
人・長屋にも話がもれる寶くじ 通常
地・寶くじうれしい話して別れ 通常
天・寶くじ真直ぐに來て一つ買ひ 通常
軸・寶くじ一枚買つて不安がかり 通常
人・まん中に富士がそびえた日本晴れ 九坡
地・まん中に保母の座りしげんげ 正一
天・まん中の恩師の白髪さみしげ 四三坊
人・まん中の恩師の白髪さみしげ 萬的
地・まん中は抜くを斬るぞのさむざむ 久米雄
天・死顔をまん中にして何故尖る 久米雄
軸・死顔をまん中にして何故尖る 久米雄
同・言ひ分を通した夜の淋しすぎ 北路
同・言ひ分を涙で聞いただけのこと 北路
同・言ひ分へ娘まともに向き直り 正一
同・言ひ分へひとへびく〜動くのど佛 北路
軸・言ひ分と一しよに酒がきれてい 久米雄
佳・花束が体温表をぐつと上げ 北路
同・年中斐もなく興奮をなだめられ 北路
人・興奮へごもりの癖を見破られ 九坡
地・興奮刺すめめる隣師のまた若く 天
天・興奮をするなと要点にはふれず 伯峯
軸・興奮のまだ純情をみとめられ 風茶子
男手が揃つて母はぐちを言い 風茶子
男手が揃つて母はぐちを言い 弓削平

柳人交歓暑中廣告を募る
是非一口は！
★一口金五十圓
幾口でも中込ま
れたい一口分
の原稿は住所と
姓と雅號程度。
活字指定はおま
かせ乞ふ一口
分は五分の一段
組三行。
★原稿締切は七月
廿日限
★廣告料は前金の
こと
川柳雜誌社

人・男手のさし湯を産婆ちとおそれ 四三坊
地・男手がほしいと思ふ雨がもり 久米雄
天・男手をきざみ煙草でたのまれる 同
人・いさゝかの秘密があつて口を閉ち 北星
地・極秘ですメモ引きちり引きちり 藤堂
天・死んでから聞く母親の秘密なり 久米雄
軸・父にして見れば小さな秘密なり 伯峯
DONの夕
四月二十五日
於 ドン喫茶店
満開
満開の札所お遍路さんが着き
汽車の窓一と枝ほしとを歩き
曳船へ右も左も咲きみだれ
満開へ寝ぼけたやうに鐘が鳴り
満開の下で財布をとられてき
満開のさくらの上は雲もなし
同



